

「日本3.0」

Vol.10

AIでもっとも割を食うのは誰か

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

最近、世の中では「AIでどんな仕事がなくなってしまふのか」という議論が盛んですが、実際にもっとも割りを食うのは誰なのでしょう。もっとも危機感を持つべきは、オフィスで働くホワイトカラーです。とくにインパクトが大きいのは、役所や企業で働く事務職と、肩書はあっても大した仕事はしていない「なんちゃって管理職」です。

事務の仕事は、定型化しやすいため、AIのもっとも得意とするところ。AI

銀行の窓口業務、役所の証明書の発行、税金の支払い、企業の領収書の精算、スケジュール管理、勤怠管理など、自動化しやすい作業はほとんどAIが担うようになるでしょう。将来のイメージは、国民の97%がオンラインで税金の支払いを行うシンガポールです。もうひとつ危機にさらされるのが「なんちゃって管理職」です。

今、大企業には、出世コースから外れた40〜50代を「担当部長」などの肩書で管理職につけていますが、こうした中間管理職はAI時代にはますます不要になります。

そもそも、AIがもっとも苦手とするのは「判断」です。しかし、「なんちゃって管理職」は「判断」をしています。「調整」を主な業務としています。こうしたAIとの差別化ができない管理職をスリム化できるかどうか、日本企業のコスト競争力のみならず、イノベーション創出能力を決定づけます。

元ソニーCEOの出井伸之氏は「ソニーは今の半分の人数でいい」と言い

ます。

「日本の企業は人が多くて余っているから、若い人の邪魔をするおじいちゃんがたくさんいるんです。人が足りなくて、全員が忙しいような会社だったころは筋肉質だったけど、日本はクビを切っちゃいけないから、ぶくぶく太って血糖値が高くなる。

人が多くて余っているから、新しいこともやらなくなるし、働かない人のために余計な仕事をつくって、無駄にレイヤーが増えてしまう。僕はソニーは今の半分の人数でできると思う」

企業が社会的な機能を持つ日本においては、人員削減はタブー視されますし、単純にリストラすればいいという話ではありません。

ただし、情に流されてこの世代を今のまま温存すれば、日本企業、さらには日本全体が沈みます。「なんちゃって管理職」が、若手のチャレンジを邪魔しない構造をつくるのが急務なのです。



Profile

NewsPicks編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」がある。